終わらない議論

枯葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わらない議論

【Ｎコード】
Ｎ６８８２Ｚ

【作者名】
枯葉花

【あらすじ】
朝来てみたら、メダカが死んでる――！！クラスのみんなで、犯人を突き止めようとするが・・・。議論は終わらない。
――グロくないことだけが取り柄のミステリ的な物語、ここに惨状！！

（前書き）

これは、フィクションです。なにがなんでもフィクションです。誰が何と言おうと。

「華子。早く言っちゃえよー。お前なんだろ？」
「ちょっと、その言い方やめてよねー。まだ華子かどうか分かんないじゃないっ！」
「私じゃないもんっ！佐々良の方が怪しいでしょ・・・。」
「はぁ？俺だってか？バカ言うなよ。俺がなんでメダカを殺さなきゃいけねぇンダヨ。」
「何よ！！佐々良、いっつも臭い、臭いって言ってたじゃない。早く死なねーかなぁとかも言ってたでしょっ！」
「ンなのジョークに決まってんだろ？真に受け過ぎなんだよ。武田は。」
「普通真に受けるよっ！それに、最後まで教室にいた佐々良が一番怪しいんだから！」
「はぁ！？何言ってんだよっ！朝一番に来た華子が怪しいだろうがっ！」
「だから私じゃないってばっ！それに、私が来てすぐに小田君が来たもの。私が何もしてないことは、小田君が一番知っているわ。」
「僕は、確かに佐藤の後に来たけどさ。僕が佐藤のすぐ後に来たなんて、僕分かんないし。断言できないよ。」
「そーだよなっ！！華子が怪しいよなァ～。」
「佐々良。あんまり喜ぶなよ。お前がわざわざ水道の水をメダカの水槽に入れたりしないってこと、俺知ってからさ。」
「私。思うんだけどー。竹上なら殺せると思うんだー。」
「はぁ？お前、ややこしくなるから黙っとけ。」
「なんで俺が殺せると思うわけェ？俺、メダカとか興味ないんだけどぉ？」
「興味ないからだってー。しかも、竹上飼育係じゃーん」
「飼育係メダカ殺すわけないでしょん。バカスズキ。」

「バカスズキじゃないもん。だって、掃除のとき水いれれば済むことじゃーん。分かんないのぉ？バカタケジョー。」
「お前、ケンカ売ってんのかぁ！！」
「話ずれてるよ。竹上。俺は分かってるよ。だって、マジでそんな風に殺そうって思っているなら、掃除のたびにちょっとづつカルキぬいてない水いれたら、確実に殺せるし。そうしなかったってことは、急に思いついたか、別の人ってことだよ。」
「庇ってんのか！？公明。お前フォロー下手だろ？」
「庇ってやったんだから、黙っとけよ。バカは。」
「喧嘩売ってたのか！？おいっ！」
「そうだよねぇ。前の水の跡があったもんね。てか、あっこも飼育係だよね。」
「そうよ！！メダちゃん達が死んだのに、なんでみんなそんな冷静なの！？信じられないっ！！先生もあり得ないよ！！自分は仕事をするから、お前らで話し合えとか・・・。なんで、お墓に入れてやる時間もくれないのよぉ・・・。」
「あっこ！！ごめんね。あっこが一番メダカ達に、優しく接してたもんね。ホントに、あっこの言うとおりだよ。墓に埋めるぐらいしたらいいのにね・・・。水槽でひっくり返ってる姿、酷いもん。」
「そうだよなー。こんなことする奴、最悪だよなァ。早く出て来てくんね？俺、帰りたいんだけどぉ。」

この問題は解決しない。

この問題は俺が塚本のために解決させない・・・。

「ねぇ、塚本ってさ。昨日の放課後、教室にいなかった？」
「へっ。」
「あー私も、なんで逆走してんのかなぁって、不思議に思ってたんだぁ。」

「い、行った。けど、俺が行ったときには、まだメダカ、生きてたし・・・。」
「そりゃぁ。犯人は、そう言うよねェ。」
「ほ、ほんとだよ・・・。う、疑うなら、俺より後に来たやつだぞ・・・。」
「怪しい～！！メッチャ怪しい。」
「俺じゃないっ！！俺は、メダカの水が汚いのが・・・我慢ならなかっただけだしっ！！」
「どういうこと！？」
「お前がやったのか！？」
「何、正義者ぶってんだよ！！メダカ殺しがっ！！」
「俺じゃない！！チャンと・・・。カルキの抜いたやつを注いだんだ！！」
「はぁ！？カルキが短時間で抜ける分けないじゃん！！なのに、正義者ぶってカルキ抜き突っ込んで水道水流し込んだわけっ！？」
「正義者ぶってなんかいないっ！！メダカの水が汚いせいで、俺のアレルギー症状が出るんだよ！！俺は、潔癖症なんだ。なのに先生は、そんなの気の持ち用だって相手にしてくんないから、俺が自分で行動起こすしかないと思って・・・。」
「だから、メダカを殺したってわけ？最低！！厚田ちゃんこんなに悲しんでるんだよ！！」
「違う！！俺は、前日からカルキ抜きをしてたんだ！！それを、皆が帰ってから入れようと、前々から準備していたんだ！！なのに・・・なんで、死んじゃうんだよォ！！」
良いぞ。塚本。俺が、お前のために。お前は、自分のために。悪者になるんだ。俺は、これからは見守ってやることしかできない・・・。
「そんな嘘ついて！！私、先生に言って来るっ！！最低だよ・・・

塚本って。」

厚田が駆け出した。最低か。その言葉が聞きたくて来たんだ。俺たちは。

「あとは、よろしくな・・・徳森。」

「あぁ・・・。がんばれよ。塚本。」

後は、俺の出番だ。

「塚本は!!後、2日でこの町を出るっ!!」

「嘘つけ!!おまえも、グルだったのか!徳森ぃ!!」

「違うんだ・・・・。塚本は、あのメダカのせいで、この町を出るんだよっ!!」

塚本には、アレルギーがあった。澄んだ空気の中でしか、生活できないのだ。なのに、こんな空気の淀んだところに来たのは、俺のせいだ。厳密に言うと、俺の家族のせいだ。俺ン家は不動産屋で、ここを紹介してしまったのだ。そして、塚本の苦労に満ちた学校生活が始まった。担任は、アレルギーの存在を認めない古い奴で、アレルギー発症による欠席を、すべて無断欠席にした。

この町を出るというのは、正しい選択だったと思う。けど、塚本が変なことを言い出した。

『俺は、みんなの心に残っていたい。』手伝おうと思った。そして、考えたのがメダカ殺し。やり方は・・・墓場まで持っていこうと思う。

「お前らは、事情を知らないから・・・知らないからそんなことがいえるんだっ!」

塚本。俺、やりきったよ。これで、お前は安心してここを去れるな・

・・・。

「徳森っ！！前っ・・・・。」

え？明るい・・・？夜なのに？何か、足が重い。なんでだろう？なァ。塚本――。

（後書き）

こんな会話文だらけの読みづらい物語を読んで下さり、恐悦至極です。地に身に、『塚本』でしか出なかった塚本君は塚本明って名前で、徳森君は徳森公明ですので。よろしくおねがいいたします。（何を――という突込みは無しで）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6882z/

終わらない議論

2011年12月23日01時50分発行